

世界にパンを届けよう。 救缶鳥プロジェクト



株式会社パン・アキモト代表取締役 秋元 義彦

創業者の強い思い

パン・アキモトは、栃木県那須高原の麓、那須塩原市の一角にある「街のパン屋」です。

創業は1948年、戦後の食糧難時代に、航空会社の国際線の無線通信士を脱サラした1人の青年によって「事業」が始められました。その人が、私の親爺であり先代社長である秋元健二です（1997年10月、80歳で逝去）。あちこちの海外を見てきた人であり、また食糧不足の時代を迎えた日本で「パン屋の仕事開始」は必然的でした。開業当時は、欧米化の波が押し寄せ始めたと同時に、いまだ「ヒモイ食生活」の環境が続いていたそうです。配給パン屋、学校給食指定パン工場、そして街のパン屋へと変遷を辿ってきました。

「周りに喜ばれる会社になりたい」との希望があり、会社の発展は創業者としての喜びでもありました。しかし、「もう一つの強い思い」が心にあり、そのための試みにもチャレンジしていました。それは、戦争によって日本がアジアの国々に対して「申し訳ないことをした。何かで償いをしたい…」という一念から、自分の職業を通じての奉仕（サービスの提供）について模索していたことです。そして、アジア地区からパン屋の創業を目指す青年たちをアキモトに迎え、製パン技術を教え、日本の中古機械を持たせて自国へ送り返したい、という思いの実現に尽力していました。知人の外務官僚や日本大使に相談を持ちかけたりもしていましたが、残念ながら当時からほんの数年前までは、入国管理法で人の流れに厳しい制限があり、見習い技術者を迎えることは出来ませんでした。

しかし、1995年「パンの缶詰」の開発で、「創

業者の夢実現」に近づくことが出来たのです。

「パンの缶詰」の開発

1995年に発生した阪神・淡路大震災の被災者へ、救援物資として当社は直ちにパンを送りましたが、賞味期限の関係でその一部が食されることなく廃棄処分されてしまいました。被災者から「長期保存可能でなおかつ美味しいパンの製造を」という要望が、弊社に宿題として与えられました。それまでは必要のなかったモノでしたが、食生活の向上と大規模災害の危険性の高まりで、にわかにならざるを得ない状況とされ始めました。しかし「長期保存性のパン」と「シットリしたパン」は、目的・価値観・製法など全く別なモノで、二律背反の関係にありました。

被災者からの熱のこもった要請が我らパン職人の心を動かし、前例のない事へのチャレンジが始まりました。度重なる失敗と喪失感に悩まされながらも、仮説を立て実験を続けるうちに、幾つもの新たな発見と出会いがありました。そして約1年後、ついに現在のパンの缶詰の原型が出来上がりました。そしてその後、購入者の声と評価を真摯に受け止めて製品の「進化と深化」を進めていき、2004年に発生した新潟県中越地震の被災者から高い評価を受け、その価値が全国へ広まってきました。

「救缶鳥プロジェクト」の誕生

パンの缶詰は、長期保存可能で美味しいパンとしての認知が高まり、販売数は伸びていきましたが、一方で缶詰とはいえ、賞味期限が来ると廃棄処分される運命にあります。そんな中、スマトラ沖の大地震の津波による被災地のひとつスリランカから、日本語学校の関係者の「賞味期限の切れ

る前のモノ（中古品）があったら送ってほしい」との連絡を受けました。その時は新品の製品をすぐに数千缶現地へ送りましたが、片や捨てられてしまう可能性のあるパンの缶詰、そしてもう一方で中古品でもよいから送ってほしいと求める災害被災地や飢餓に苦しむ国々…。この2つのテーマを同時に解決出来ないかと、実現したときの夢を描きながら検討を繰り返し、あちこちへ相談に出かけました。

努力の甲斐とたくさんの関係者の応援で、「備蓄食のリユースシステム」が誕生しました。当初は物流コストの関係で大手企業や自治体向けの大口サービスだけでしたが、そのシステムに賛同する個人の要請で「小ロットでも参画できる 救缶鳥」が出来上がりました。

自然災害の発生頻度が高い日本では、備蓄に対する関心は高いのですが、その後の事にはほとんどの人が無関心。そこで、ゴミ化減少、もったいない運動、市民参加型国際貢献などを合い言葉に「救缶鳥プロジェクト」を推進し始めています。

プロジェクトのシステム

救缶鳥プロジェクトは、「従来の2倍サイズの備蓄用パンの缶詰 15缶入り」を称し、賞味期限の切れる前にお客様から未利用品を下取りし、海外の飢餓地域へ無償提供することを特徴としています。システムは以下のとおりです（図も参照）。

- ① 「救缶鳥プロジェクト」は、あらかじめ2年後の未利用備食を下取り・回収し、海外への義捐物資としてプレゼントを行う案内をする。
- ② 参加・購入予定者に申込書を記入してもらいパン・アキモトへ郵送（メール・FAXでも可）。
- ③ 参加者の希望日にヤマト宅急便の代金着払いで商品を発送。購入のお礼の文章と同時に、住所移転などが

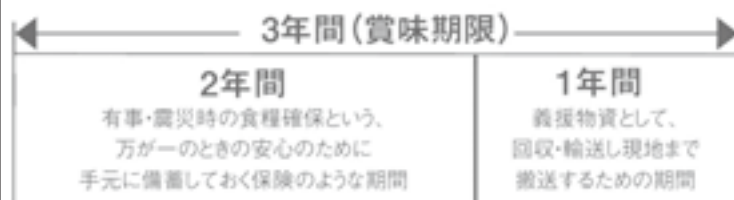
あった場合の手続きや2年後の回収案内などを同封。

- ④ 約2年後にヤマトのメール便にて「未利用備蓄品の海外義捐と再購入のご案内」を行い、再度購入希望の購入者から「未利用在庫品の数量、次回配送希望日・時間帯等」を返信郵便（メール・FAXでも可）で受ける。
- ⑤ 再購入予定のお客様からの情報を基に、未利用回収数（ α ）・1缶につき100円を値引いた価格での代金着払いで、次回品を発送。
- ⑥ 参加購入者は希望日に届いた次回品を受け取ると同時に、未利用品をヤマト宅急便に回収してもらう。代金は12,000円マイナス（100円× α ）

救缶鳥プロジェクトの流れ

【救】・・・2年後に国際貢献となる非常食「救缶鳥」

安心できる非常食として、2年間備蓄します。
備蓄から2年後、義援物資として国際貢献に役立てます。
残り約1年の賞味期限の間に、日本中から回収・輸送され、
飢餓に苦しむ国々へ届けられます。



【缶】・・・「救缶鳥」が義援先の国々に届くまで



2年間備蓄後、回収の1か月から2か月前に支援活動をご案内いたします。
再度備蓄のお申し込み、納品と同時に回収ができます。
（配送・回収は安心のヤマト運輸が行います）
・購入代金から「回収個数×100円」ディスカウントいたします。
・支援活動の参加者に感謝状が送られます。

日本国際飢餓対策機構等を通じてコンテナで輸送します。
世界の飢餓に苦しむ人々を救う食糧として現地に届けます。

【鳥】・・・義援先に届けるメッセージ

「救缶鳥」には義援先の人々へ向けてメッセージを書きこむことができます。



救缶鳥の外観

救缶鳥の中のパン、いちご味(写真)
そのほかオレンジ味とレーズン味がある



で決済する。回収品に名前や義捐先にメッセージを記入する欄があるので自由に記載可。

- ⑦ ヤマト宅急便は回収品をNGO・日本国際飢餓対策機構(以下JIFH)の指定する倉庫へ配送。参加者(団体)などが希望すれば、JIFHからの感謝状の受領も可。
- ⑧ JIFHは回収品の製品チェックを行い、輸出準備をする。(つぶれ等の不良品は処分する)
- ⑨ ある一定数が集まったら、あらかじめ調査した義損先へ輸出する。現地スタッフが当該国の政府と非関税品の認証を受けておく。リーズナブル価格の輸送手段で発送。
- ⑩ 現地スタッフは贈られた義損物資を、速やかに被災者や飢餓に苦しむ地域の人々に分配する。配布の様子を写真撮影や報告書にまとめ、インターネットを利用して日本のJIFH本部へ送付。
- ⑪ JIFH本部はパン・アキモトへその報告書を転送。アキモトはネットで繋がっている参加者に報告書を送付。
- ⑫ 参加者(団体)は、その報告書や写真を自身のHPに掲載可。

このプロジェクトは、今ぐんぐんスピードを上げて全国へ広まっています(試験的にこのプロジェクトを導入している自治体もあります)。

おわりに

私たちは、日本人であると同時に「地球人」です。宇宙飛行士の若田さんも「我ら地球人! グロ

ーバルシティズン」と言っておられました。外から見ると美しく見える地球、現在その地球に約60億人が住んでいますが、なんとその内の10億人が飢餓状態にあることも事実です。1分間に17人が飢餓で命をなくしています。仲間同士・同じ星の人間が助け合うことが必要です。

個々人から出来ることを始めませんか? 生きるために必要な食物を無駄にしないこと、可能であれば譲り合うこと、そして持っている人から持てない人へのプレゼント。救缶鳥プロジェクトはそのスタートになっています。このシステムで自分たちのために備蓄を始めることが、2年後の国際貢献へつながっていくのです。

株式会社パン・アキモトのホームページ

http://www.nasuinfo.or.jp/FreeSpace/aki_pan/index.html

日本国際飢餓対策機構のホームページ

<http://www.jifh.org/>

救缶鳥5つの特徴

<p>① 通常のパン缶の2倍の大きさ</p>	
<p>② 安全な構造です</p> <p>缶のふたの切り口で手を切らない「ダブルセーフティプルトップ」採用のため安全です。</p>	<p>③ 義援物資になります</p> <p>通常の非常食とは違い、世界の飢餓を救う義援活動に参加できます。</p>
<p>④ やわらかい食感です</p> <p>普段食べているパンと同じやわらかい食感のため、食べやすくおいしい非常食です。</p>	<p>⑤ 特許製法です</p> <p>防腐剤を使わない特許製法で、健康も配慮した安心できる非常食です。</p>

山梨県国際交流協会主催の カンボジア・デーに参加して

(財)自治体国際化協会交流支援部長 角田 秀夫

はじめに

カンボジアというと皆さんは何を思い浮かべるでしょうか。アンコールワットで有名なこの国は、シンガポール、インドネシアやマレーシアなど東南アジア諸国が経済的發展を遂げる中で、1970年代から約20年間続いた内戦の影響もあり、まだまだその経済的發展が困難な状況にあります。特に内戦の中で数多くの地雷が埋められ、現在も除去されていないことが、人々の生活を立て直す上で大きな阻害要因となっています。

2010年10月24日に「カンボジア・デー」が山梨県立国際交流センターで開催され、カンボジアを知るための取り組みが様々な切り口で提供されました。

なお、この事業は、自治体国際化協会の地域国際化施策支援特別対策事業の対象事業となっています。

カンボジア・デー（カンボジアの風を感じて）の概要

一つ目は、地雷除去のための専用の重機を開発した山梨日立建機(株)社長の雨宮清氏の講演と、カンボジアにおける地雷の除去後の農業支援を行う特定非営利活動法人「豊かな大地」やカンボジアで地雷除去やその後の農業復興などに取り組むカンボジアの州の農業関係者やNPO関係者など、カンボジアからの来訪者を交えてのディスカッションが行われました。

二つ目に、カンボジア難民として来日し執筆・講演活動を行う久郷ポンナレットさんによるカンボジア舞踊とトーク、さらにはカンボジアでも活動を行う歌手岩崎けんいち氏によるトーク&ライ



カンボジア・デー・パンフレット

ブが行われ、多くの方がカンボジアのことを知るとともに、楽しめるイベントとなっていました。

山梨日立建機(株)社長の雨宮清さんによる講演の概要

カンボジアには、内戦時に多くの地雷が埋められ、内戦終結後も5万人の方が被害を受けています。対人地雷は致命的な殺傷力を持ちませんが、人々の手足を奪い、多くの障害者を生み出しています。また、多くの土地に地雷が埋められているために農地として利用することもままならず、復



雨宮清氏と地雷除去機

興の妨げとなっていました。

雨宮清さんは、1994年に商用で訪れたカンボジアで地雷によって手足を失った人々の姿を目にしたことをきっかけに、地雷除去機の開発を独力で始めました。

カンボジアにおいては、地雷除去は、カンボジア地雷除去センター（CMAC）により行われていますが、危険と隣り合わせの手作業により行われており、埋設されている地雷をすべて除去するには千年以上かかるともいわれています。そこで雨宮社長は、建機を活用し、地雷を爆発させることで除去する機械を開発しました。爆発温度や耐久性など、その開発は苦労の連続でしたが、1998年の供給開始以来、現在までに、カンボジア、アフガニスタン、ニカラグアなど世界8カ国で75台が稼働するまでになりました。

講演では、カンボジアの地雷地帯の状況や被害の実態を写真やVTRなども交えながら説明がありました。地雷の恐ろしさをよく理解していない子どもたちが被害にあうことも多いことから、現地で地雷の除去作業を実際に見せて、その恐ろしさを理解させる取り組みなどの様子もVTRで紹介

介されていました。

また、雨宮さんは、こうした現地子どもたちと日本の子どもたちとの国際交流にも力を入れており、日本の子どもたちの手紙や絵画などを持参し、地雷原に暮らす子どもたちを励ますとともに、逆に地雷原の中で懸命に生きる子どもたちの姿を日本の子どもたちに伝える活動も行っています。

この講演の中で、国際貢献といってもビジネスにし、利益を得ることが必要であると雨宮さんはおっしゃっていました。地雷除去機の開発のために多額の経費をつぎ込み、苦勞され、現在では地雷除去機を政府の援助等により多数納入するまでになった雨宮さんの言葉だけに、大変重みを感じました。

日本の持つモノづくりの技術を国際貢献に役立て、ビジネスとして成り立たせることは、持続可能な取り組みであり、日本の国際協力の有望なひとつの姿であると感じました。

NPO法人「豊かな大地」の事業紹介 およびディスカッション

NPO法人「豊かな大地」（注1）は、カンボジアのバタンバン州で地雷除去が終わった村・土地の農業環境整備や井戸の設置、学校建設などを行い、地雷や不発弾の影響を受けている人々の生活再建支援活動を行っており、専務理事の篠田さんから事業の紹介がありました。

また、今回の事業では、カンボジアから、カンボジア地雷除去センターの地域開発マネージャー、「豊かな大地」のカンボジア事務所のスタッフ、バタンバン州の農業開発担当者を招待しており、雨宮さんと篠田さんも交えて、それぞれの立場から、その実情および日本に期待することなどについてディスカッションが行われました。

その中では、協力事業は日本レベルで展開しても駄目で、現地の状況を踏まえてやらないといけないという話が印象に残りました。

（注1）NPO法人「豊かな大地」のホームページ
<http://www.good-earth-japan.org/>



久郷ボンナレットさんによるカンボジア舞踊

久郷ボンナレットさんによる カンボジア舞踊とトーク

久郷ボンナレットさんは、カンボジアのプノンペンで生まれ、1975年のポルポト政権下に行われた大量虐殺の中で、両親ときょうだい4人を失い、本人も過酷な強制労働に従事させられるという経験をしています。その後、留学していた姉を頼って難民として来日し、日本の小学校、中学校を卒業し、日本人男性と結婚し、講演活動や執筆活動を続けています（注2）。

今回は、カンボジア舞踊を披露するとともに、トークでは、質問に答える形で、また、カンボジアからの来訪者とのやりとりを交えて、カンボジアの現状の理解が進むような機会となりました。

（注2）詳しくは、久郷ボンナレット著『虹色の空』（春秋社、2009年）

その他のイベント

当日は、2004年以降毎年カンボジアを訪れ、音楽活動をしている岩崎けんいちさんによるトーク＆ライブが行われました。岩崎けんいちさんは、今回のイベントでもチラシのイラストを作成しているほか、カンボジアの現状の写真とイラストの

パネルを作成するなど音楽だけでなく多彩な活動をしており、単に音楽を楽しむという面だけでなく、カンボジア・デーにふさわしい内容となりました。

また、会場では、カンボジア料理のほか、各国の料理を楽しむ「ワールド・グルメ」やフェアトレードブースなども設けられ、多くの参加者でにぎわっていました。

国際理解教育を行う小学校での 交流

このカンボジア・デーの翌日に、カンボジアからの来訪者は、大月市立初狩小学校の子どもたちとの交流会に参加しました。この小学校では、アルミ缶回収の収益金をカンボジア復興支援のために寄付する活動を行っており、この活動を国際理解教育として教育活動に位置づけています。

事前の学習を踏まえた交流会であったため、子どもたちからもカンボジアからの来訪者に対して積極的に質問が行われました。

自分たちの集めたアルミ缶の収益金が現地においてどのように使われ、人々の役に立っているか、またカンボジアの状況やそこに暮らす小学生たちの日常生活などを実際にカンボジアの人から聞いたことは、子どもたちにとって「アルミ缶を集めること」の意味を改めて問い直す意義深い交流となりました。

一方で、5年生がつくったお米を使っての餅つきなどもあり、カンボジアからの来訪者にとっても印象深いものとなったようです。



初狩小学校における交流集会